Ⅱ特別連載Ⅱ

科学技術振興機構

『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第509回

広島大学の活動報告

安倍 学
（広島大学大学院
先進理工系科学研究科
教授）

2016～2026年
光の科学でつないだ10年間

人類は今、エネルギーの枯渇や地球温暖化など、地球規模の課題に直面しています。２０１６年、こうした課題の解決につながる科学を若い世代に伝えたいという思いから、科学技術振興機構（ＪＳＴ）「さくらサイエンスプログラム」の科学技術体験コースを始めました。

テーマは、太陽光をはじめとする光エネルギー変換です。光が物質に当たると、分子の中で何が起きるのか。その鍵を握る電子的励起状態の分子や、わずかな時間だけ存在する活性種を、分光学的に直接観測します。ふだん目にできない現象を自分の目で確かめ、地球環境をより良くする方法を考える体験を目指してきました。

分光測定を囲み、観測に挑む2026年度の招へい者ら

広島原爆ドームを視察する招へい者ら（2026年度）

この10年間に参加した若者は合計95名。台湾39名、ベトナム30名、インドネシア21名、バングラデシュ3名、インド2名です。国や文化、言葉の異なる若者たちを一週間迎えることに、始めた当初は不安もありました。それでも、「持続可能な社会に大きく貢献する光エネルギー変換を伝えたい」という思いを胸に、一歩を踏み出しました。

ところが、始まってみると、教える側の私たちが参加者からたくさんのエネルギーをもらっていました。真剣なまなざし、実験に成功したときの喜び、科学を自分の将来や母国の課題に結び付けて語る姿。その一つひとつに触れるたび、教育者として新たな気づきを得て、自分自身も学び、成長してきたと感じます。「一生忘れない一週間でした」という言葉は、何ものにも代えがたい励みです。

2026年度のプログラムスケジュール

1日目（8月2日）	インド、台湾から、大学生・大学院生・教員計8名来日 オリエンテーション、「光とは」の講義
2日目（8月3日）	光物理化学、分析化学、有機化学
3日目（8月4日）	吸収スペクトル、発光スペクトルの測定体験
4日目（8月5日）	広島平和公園と博物館を日本人学生と一緒に見学
5日目（8月6日）	時間分解分光法を用いた電子的励起状態分子の反応性調査 意見交換会
6日目（8月7日）	離日

交流はプログラムを実施している期間だけにとどまりません。出張先でかつての参加者（同窓生）と食事を囲み、科学や日々の暮らしについて語り合うことも、今では人生の楽しみの一つになりました。科学を学ぶために出会った若者たちが、国境を越えた友人となり、世界の未来をともに考える仲間になっていく。そのつながりこそ、この10年間に得た大切な財産です。

これまでの経験を糧に、今後はＭＩＣＥアンバサダー（※）としての立場も生かし、科学を通じた交流と世界平和に向けた活動をさらに進めていきたいと考えています。その歩みには、このプログラムを支えてくださる皆様の温かく力強いご協力が欠かせません。若者が科学に希望を見いだし、互いを理解し、より良い未来をともにつくる。その願いを、これからも皆様と育てていければ幸いです。

※ＭＩＣＥアンバサダー：日本のプレゼンス向上や国際会議の誘致活動を担う有識者を任命する制度

■２０２６年度のプログラム

本年度のさくらサイエンスプログラムでは、これまで育んできた交流が、新しい広がりを見せました。初めてインドから2名の学生を迎えて開催できたことは、本プログラムにとって大きな一歩です。異なる環境で学ぶ学生が同じ研究室に集い、光エネルギー変換の実験に向き合う。その光景から、科学を通じた出会いが、国を越えて確かにつながっていくことを実感しました。台湾からは、次の世代を育てる若い先生を招へいすることができました。これまでの参加者との交流を、その人の学びで終わらせず、次の若者へ手渡していく。その新たな循環が始まろうとしています。

また、博士課程後期への進学を控えた日本人学生2名がティーチングアシスタントとして加わり、海外からの参加者と同じ目線で学びを支えました。年齢や国籍を越えて語り合い、ともに実験する時間は、双方にとってかけがえのない経験となり、若い世代どうしの結びつきを生みました。さらに、研究室に所属するインドと中国からの学生も交流に加わり、出身国の異なる人々の輪が自然に広がりました。

招へいした学生、若い先生、日本人のＴＡ、研究室の留学生。ひとつのプログラムで生まれた対話が、研究室の仲間へ、そしてそれぞれの国や将来へと伸びていく様子を目の当たりにしました。人と人が出会い、互いを知り、次の誰かへつないでいく。その小さな積み重ねこそ、世界の相互理解と平和を支える力になると信じています。

２０２６年に芽生えたこのつながりを大切に育て、科学を通じて希望を分かち合う活動を、これからも続けていきます。

講義に耳を傾ける「2016年度」の招へい者ら

修了証を手にした「2016年度」の招へい者ら（後列中央は著者の安倍教授）